



日本橋 花藤の由来

ちょんまげのお花屋さん にいのみとうきち 初代 新吞藤吉

ちょんまげを結び 江戸・日本橋へ

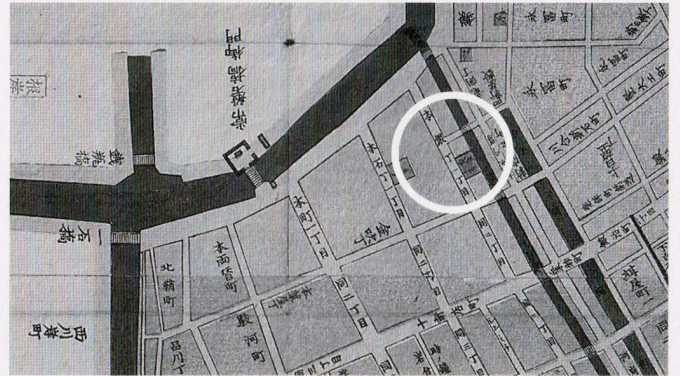
花藤の創業は慶応元年（1865）に遡ります。初代は三河安城出身の新吞藤吉。本来は「新美」のところ、戸籍をつくる際に「新吞」と間違えられてしまったようです。ちょんまげ姿の写真が残っていますが侍だったのかは定かではありません。しかし安城の士族に連なる家の出であることは確かなようです。



着物にちょんまげ姿の
初代・新吞藤吉

三河の商人 家康の入府とともに江戸へ

藤吉の詳しい経歴や、どのような理由で幕末に江戸へ出てきたのかということは、先の関東大震災と戦争で、貴重な資料が焼失してしまったため分からなくなってしまいました。しかし、江戸時代に徳川家康の入府とともに多くの三河の商人が江戸に上っている歴史を見ても、藤吉もその流れであったように考えられます。



日本橋北神田浜町絵図
(国立国会図書館デジタル化資料より)

創業から 150 年 最も長い歴史のお花屋さん

藤吉は、縁あって日本橋区本銀町1丁目（現在の店舗所在地である本石町）に住まいを定めました。そして、花の店を開き、名前の一字をとって、屋号を「花藤」と名付けました。藤吉は日本橋の本店に花を納品するようになりました。明治の初期までは頭にちょんまげを結っていたため、「ちょんまげの花屋」として、評判だったようです。以来、150年近く。今では東京で最も長い歴史をもつ花屋になりました。



お柵を入れて
運んだと思われる袋



リヤカーを引き 佃までお柵と仏花を届ける

当時の営業は店売りだけでなく、神棚にお供えするお柵と仏花の引き売りも行っていました。リヤカーに花を乗せて、店から佃島の方まで車を引いて売り歩きました。みんな、一日一足のわらじを履き切ってしまうほど、商売熱心だったようです。こうして、「ちょんまげの花屋」の名は、広く知れ渡っていきました。

2つの苦難を乗り越えた 二代目 新美六松

卓上花を中心に 広い範囲に拡げる

二代目の新美六松も親に劣らぬ働き者でした。いつしか従業員も増え、店舗も当時としては珍しいモダンな3階建ての煉瓦造りに新築しました。営業内容は、宴会を中心とした卓上花で、なかでも「じかもり」を得意とし、お得意様も東洋軒、精養軒といった古からの老舗に拡げ、上野、丸の内、銀座といった広い地域に納めていました。



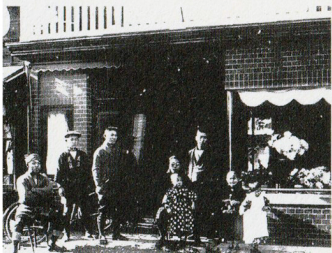
70歳ぐらいの
新美六松



卓上に直接
花を盛る「じかもり」

二度の災禍に見舞われた 苦難の時代

大正12年(1923)9月、六松が苦心して作り上げた煉瓦造りの店舗は、関東大震災で一瞬にして瓦礫の山となってしまいました。従業員とともに苦難を乗り越えましたが、昭和19年(1944)再び試練が訪れます。11月、東京大空襲の戦火により、お店はすっかり灰塵と化してしまいました。そのため、一時、千葉県きおろしの木下に疎開しました。



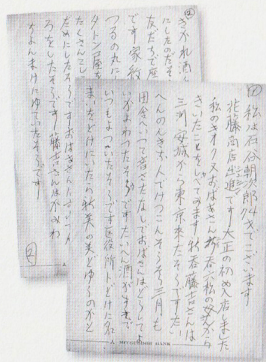
煉瓦造りのモダンな店舗



利休古流の花展の
際の栄次郎

利休古流の師匠となった長男・栄次郎

二代目を継いだ六松は次男でした。長男である栄次郎は、戦争から戻り、華道・利休古流の家元となりました。写真の栄次郎の後ろの幕に描かれた鶴の紋は新美家の家紋です。初代の出身地である三河の伝統芸能・三河万歳の「三羽鶴の舞」からとったようです。お正月には三河万歳を呼び、華やかにお祝いをしていました。



花藤に残る石谷氏が
記した資料

かつての従業員が 書き残した貴重な資料

大震災と戦争という二度の天災、人災により、大切な古文書類や写真は焼失してしまいました。しかし、こうして花藤の歴史を記すことができるのは、この時代の従業員・石谷朝次郎さんが六松の母から聞いたことを書き記してくれていたためです。当時の人々の店への思いをも伝える貴重な資料となっています。

日本経済の復興とともに 三代目 にい み えい いち 新美栄一

日本橋に戻り 再び花藤の明りを灯す

栄一は召集を受けていましたが、命だけは永らえて、戦地から帰還することができました。そして本石町にバラックを建設し、花藤は営業を再開します。焼け野原となった東京で、神棚もないような時でさえ、人々は花を求めていました。栄一は天皇陛下が乗られるお召し列車に花を活けたりと、花藤の歴史をしっかりと受け継ぎました。



六松の長男である
新美栄一

戦後、企業の復興と ともに立ち直る

お店の周辺には戦前から、日本銀行をはじめ日本を代表する大会社が多く所在しています。戦後、日本の経済が目覚ましく復興するとともに、そうした企業もまた、著しく業績を伸ばしました。花藤でも、会社関係の宴会花の注文を受けるようになり、ようやく戦災のダメージから立ち直ることができたのです。



戦後に立て直した店舗の前で

一年を通して必要と される法人需要を強化

しかし、宴会花はシーズンに限られることが問題でした。春や秋の結婚シーズンは忙しいけれど、夏や冬は仕事かとたんに暇になってしまいます。そこで、栄一は、店の営業形態を宴会花から通年仕事のある法人関係の納品にチェンジさせました。企業で行われていた社員のためのお花のお稽古にも多数納めていました。また栄一は、様々な大企業のオフィスに花を活けるようになります。



かつてのさくら銀行のロビーに活けられた
正月花

歴史を繋ぐ 四代目 にい み と し こ 新美登志子

生涯現役を貫き 花藤ののれんを守る

昭和48年11月、55歳の若さで栄一は急死します。その後を継いだのが、栄一の妻、登志子でした。登志子は、お客様からの温かい支援と、従業員に支えられ、戦後、栄一が築き上げたお店の信用を守り抜きました。また、時代の変化に合わせてヨーロッパのデザインを取り入れつつも、日本橋のお客様の好みに合わせた「日本橋流」の上品なアレンジメントを手掛けました。「生涯現役」を貫き、今なお店頭でお客様をお迎えしています。



雑誌のインタビューを
受けた際の新美登志子

生涯現役
栄一

オフィス街、日本橋の オアシスとして

時代の変化、まちの変化に合わせた 店作りを目指して

現在は、五代目として長女の倉岡芳子と次女の須藤明子が代表を務めています。かつて日本橋本石町は、住居も多数ありましたが、今では完全にオフィス街となりました。神田駅や三越前駅に近いので、花藤前の日銀通りも会社関係の社員の通勤路となっています。そうした会社員の中でも、女性社員の割合が高くなってきているようです。花藤としても、そうした女性たちに愛される店作りをと考え、店舗を改築しました。

店舗はスタッフがアレンジしている姿を通りから見ていただけるように工夫しました。店内には接客用のカウンターと椅子を備え、お客様に寛いでいただけるようにしました。また、床面の水気もできるだけとるように心がけ、お客様にとって心地の良いスペース作りを心掛けています。

冷蔵室に納めている生花だけでなく、店内には季節の枝ものを多数そろえています。「オフィス街の中で、オアシスのような場所でありたい」。そんな思いを込めて、花藤は店作りを行っています。



107



カーネーションを用いた 動物アレンジメント

倉岡芳子が考案したカーネーションを使った動物の形のアレンジメントは、女性はもちろん子どもたちにも人気となり雑誌や新聞にも取り上げられました。今なお愛され、犬や猫を中心に、オーダーに応じて様々な動物を手掛けています。そのときどきの花の状態や色で異なる表情になるのも、愛らしさの一つかもしれません。

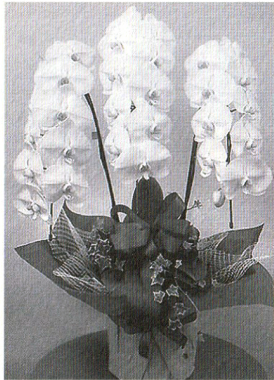
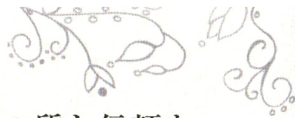


アレンジメント教室の様子。中央が代表の倉岡芳子

お花の美しさを伝える アレンジメント教室

勤め帰りの女性などを対象にしたアレンジメント教室も喜ばれています。倉岡がヨーロッパで習得したデザインを取り入れた、アレンジメントを学びに、これまで多くの女性が通ってきました。また、小学校などでもアレンジメントを教え、子どもたちにお花の美しさ、創作の楽しさを伝えています。

108



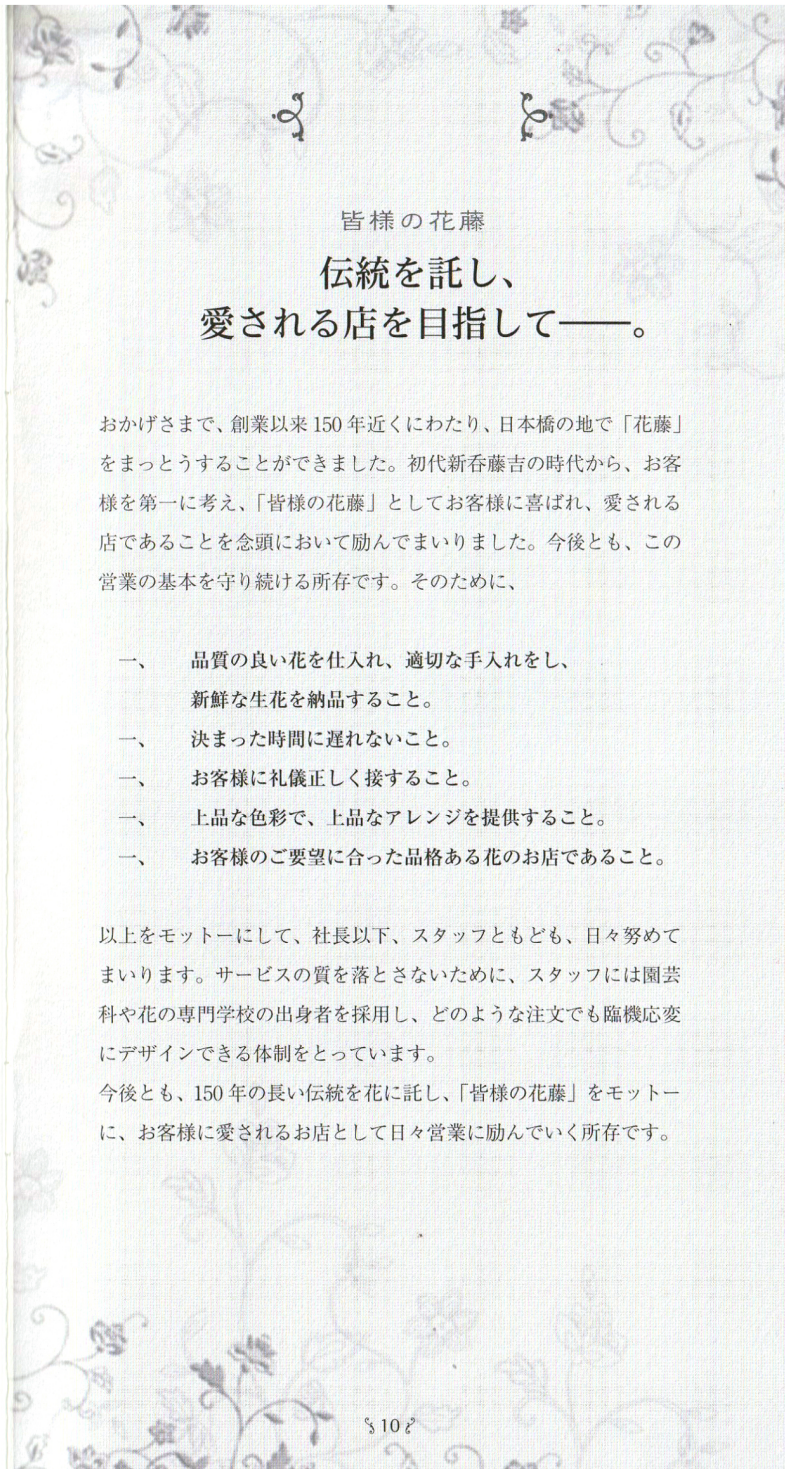
国産にこだわった上質な胡蝶蘭

花藤の質と信頼を 象徴する胡蝶蘭

花藤の花の質をもっとも表しているのが、胡蝶蘭です。お祝いの席を飾るものだからこそ、良いものをお届けするよう努力しています。長く契約している日本の胡蝶蘭の生産者から、「花藤のために」と育てられた上質なものを仕入れています。徹底した品質管理が、花藤の花の美しさと信用を守り続けているのです。

モダンで品格のある花藤のアレンジメント

花藤は、高品質な花を用いて、モダンでありながら、洗練された品格のあるアレンジメントを制作しています。オーダーメイドのウェディングのブーケや会場装花も大変好評をいただいています。お客様のご要望に合わせながら、150年近い歴史を持つ日本橋の花屋として、「花藤らしさ」を感じていただける、上品で人々の心を和ませる花を、いつまでも提供していきたいと思っています。また、デパートなどの文化イベントなどにも積極的に参加していきたいと思っています。幸い、幕張メッセで開かれた国際眼鏡展において、花藤は最優秀賞の受賞の栄にも浴しました。これは、約25坪のフロアに、フランス風の庭園を企画デザインしたことが認められたものです。



皆様の花藤

伝統を託し、 愛される店を目指して——。

おかげさまで、創業以来150年近くにわたり、日本橋の地で「花藤」をまっとうすることができました。初代新呑藤吉の時代から、お客様を第一に考え、「皆様の花藤」としてお客様に喜ばれ、愛される店であることを念頭において励んでまいりました。今後とも、この営業の基本を守り続ける所存です。そのために、

- 一、 品質の良い花を仕入れ、適切な手入れをし、新鮮な生花を納品すること。
- 一、 決まった時間に遅れないこと。
- 一、 お客様に礼儀正しく接すること。
- 一、 上品な色彩で、上品なアレンジを提供すること。
- 一、 お客様のご要望に合った品格ある花のお店であること。

以上をモットーにして、社長以下、スタッフともども、日々努めてまいります。サービスの質を落とさないために、スタッフには園芸科や花の専門学校の出身者を採用し、どのような注文でも臨機応変にデザインできる体制をとっています。

今後とも、150年の長い伝統を花に託し、「皆様の花藤」をモットーに、お客様に愛されるお店として日々営業に励んでいく所存です。



株式会社 花藤

〒103-0021 東京都中央区日本橋本石町4-5-9
TEL 03-3241-0087 (代表)
FAX 03-3241-0085
<http://www.hanatoh.co.jp/>

創業年 慶応元年(1865) 創業者 新呑藤吉

代表者
代表取締役 倉岡芳子